

日本と世界をつなぐ日本語教員プロジェクト

日本文学科 澤邊裕子

1. 背景・目的

国際交流基金が2010年に発表した海外日本語教育機関調査の速報によると、今日、海外における日本語学習者数はほぼ365万人に達し、過去最高の数となっている。こうした背景の中、日本語教育の専門知識を持った教師の養成がますます求められるようになってきている。本学の日本文学科では2006年度に日本語教員養成課程を開設し、国内外で活躍できる人材の育成に力を注いできた。2008年度には初めて海外日本語教育機関の視察を行う5泊6日の韓国研修を実施し、14名の学生が参加した。帰国後、仙台市内の日本語学校で日本語教師として教壇に立つ卒業生、チューターとして日本語学習者の学習支援に携わる学生や海外での日本語教育に携わることを目指す学生などが出たことや、研修後に提出された報告レポートの内容から、このような研修が日本語教育に対する学習のモチベーションを高め、学生たちの成長を大きく促す可能性があることが確認された。

本研究では2008年度の実践を踏まえ、韓国研修を柱とした教員養成プロジェクトを実施した。海外における日本語学習者は地理的に近い東アジアが学習者数全体の6割を占め、その中でも韓国の学習者が最も多く、世界全体の約30%を占める。最も日本語教育が盛んな韓国の教育現場を体験すること、また、自らも韓国語や韓国文化を学ぶ体験をすることは日本語学習者の視点に立って物事を考え、より広い視野で日本語や日本、日本文化を捉えるという、日本語教師に最も必要な態度育成に大きな意味を持つと考

えられる。本報告書ではプロジェクトにおける学生の学びについて、提出されたレポートのコメントを引用しながら述べていきたい。

2. 実施内容

本プロジェクトへの参加者内訳を表1に示す。参加者は日本文学科の日本語教員養成課程で学ぶ学部生20名と、大学院で日本語教育を専攻する大学院生（交換留学生を含む）3名の合計23名であった。これに日本文学科の教員2名が引率者として同行した。

表1 プロジェクト参加者内訳

日本文学科2年生	9名
日本文学科3年生	11名
大学院生（日本語・日本文学専攻）	3名
合計	23名

韓国研修は2010年9月13日（月）～9月19日（日）の6泊7日の日程で行われた。研修の日程及び主な内容を表2に示す。

表2 韓国研修日程

月日（曜日）	主な研修場所	内容
9月13日（月）	出発日	
9月14日（火）	忠南大学校	授業参加
9月15日（水）	慶福ビジネス高等学校	授業見学
9月16日（木）	日韓文化交流センター トトロハウス	韓国語授業
9月17日（金）	国際交流基金 ソウル日本文	大真大学校の 学生との協働

	化センター	学習
9月18日(土)	自由行動	自己研修
9月19日(日)	帰国日	

研修の主な目的は日本語教育事情視察と学習者との異文化交流である。この目的を果たすため、訪問地及び研修内容を決定した。

まず、日本語教育現場について理解を深めるため、高校、大学、社会人が学ぶ教育施設を視察することとした。慶福ビジネス高等学校では第二外国語として日本語教育が行われている。日本の高校との交流活動も長年にわたり盛んに行っている国際的な学校であり、日本語教育の歴史も長い。

大学は本学の協定校である大田市の忠南大学校の日本語日文科を訪問した。毎年本学科に交換留学生が来ており、交流が活発に行われている。社会人を対象とした日本語クラスは、ソウル市にある独立行政法人国際交流基金ソウル日本文化センターの上級者向け日本語講座を見学及び参加することとした。この講座は日本語能力試験の1級取得者を対象とした世界的に見ても珍しい日本語講座である。こうした日本語教育施設3か所を見学することで、初級から上級までの幅広いレベル、そして高校生から社会人まで広い年齢層の学習者との交流が可能となった。

さらに特別授業として、弘益大学校の岩井朝乃先生による「異文化コミュニケーション」授業、日韓交流施設であるトトロハウスにおいて韓国語授業や韓国の民俗衣装「韓服」の試着も体験した。また、景福宮、民俗博物館の見学も行い、韓国の歴史的な建造物や文化歴史に触れる時間も設けた。

ここからは、訪問地別に研修内容について述べることとする。

9月14日(火)

ソウル市内のホテルを午前9時に出発し、高速バスで大田市にある忠南大学校へ向かった。昼前に到着し、日本語日文科の学生との交流会が行われた。構内をバスで回るキャンパスツアーの後、コースA(日本詩歌文学+ビジネス日本語)とコースB(日本語漢字漢文+ビジネス日本語)の2つに分かれて日本語の会話や漢字、日本文学の講義に参加した(写真1)。さらに夕食時も大学生同士の交流を深め、一日限りではあったが密度の濃い時間を過ごすことができた。



写真1 忠南大学校での日本語講義に参加

9月15日(水)

午前中、景福宮(写真2)を見学した。景福宮は、1935年、李氏朝鮮の創始者である李成桂(イ・ソンケ)が創建した宮殿である。宮内には勤政殿、慶会楼など多くの文化財がある。



写真2 景福宮

午後は慶福ビジネス高等学校で日本語授業に参加した。2クラスに分かれ、初級の会話や文

法を学ぶ授業の見学を行った（写真 3,4）。日本語を学ぶ高校生の会話のパートナーになりながら交流を図るとともに、ICT の活用が進む韓国の教育現場に触れる機会となった。



写真 3 慶福ビジネス高等学校の日本語授業(1)



写真 4 慶福ビジネス高等学校の日本語授業(2)



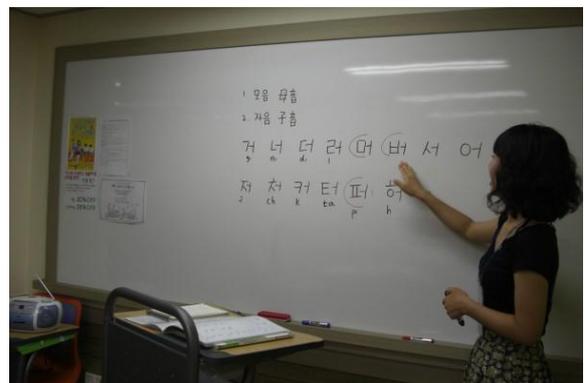
写真 5 ロッテワールド内民俗博物館

授業見学後、ロッテワールド内民俗博物館（写真 5）を見学した。この施設は時代別に韓国の歴

史と文化がコンパクトに紹介してある私設博物館である。

9月16日（木）

午前中に日韓文化交流センターである「トトロハウス」において韓国語の体験授業を受講した。少人数クラスに分かれ、ハングルの読み書きと、基本的な挨拶や歌などを学んだ（写真 6）。ハングルが読める学生のためのクラスでは韓国語だけで授業を行う直接法、ハングルが読めな



い学生のクラスでは日本語を媒介語とした間接法で授業が行われた。

写真 6 トトロハウスでの韓国語授業

午後、国際交流基金ソウル日本文化センターで特別授業「異文化コミュニケーション」（講師 岩井朝乃先生）を受講した。授業はワークショップ形式で行われ、研修参加者が韓国に来て体験したことを各自出し合いながら韓国と日本の「見える文化」と「見えない文化」について考え、文化とは何か、文化背景が異なる人と付き合うために何が必要か、など異文化コミュニケーションに必要な考え方について学んだ（写真 7）。



写真7 異文化コミュニケーション特別授業

夕食後、夜間（19時～21時）に行われる国際交流基金ソウル日本文化センターの日本語講座に参加した。「対話技術」と「待遇表現」の2つのクラスに分かれ、上級レベルの日本語学習者の会話パートナー、インタビューの相手となりながら学習者との交流を図った（写真8）。



写真8 上級日本語講座での授業

9月17日（金）

終日、大真大学の大学生との協働学習「韓国文化探検リサーチ」を行った。大真大学はソウル近郊の京畿道にある私立大学で、本学科卒業生が日本語教師として活躍している。今回、本学科の学生と大真大学のボランティアの学生との間でグループを組み、事前に設定したリサーチテーマ（表3）に沿って目的地へ行き、半日間リサーチをして発見したこと、考察した

ことについて発表し合った（写真9）。

表3 韓国文化探訪リサーチテーマ一覧

グループ	リサーチテーマ
A	韓国の伝統的な建築物と衣装
B	美容に関する意識について
C	韓国のご飯のお供とは
D	目指せ、韓国美人！流行追求の旅
E	韓国の伝統茶屋ってどんなところ？
F	日本と韓国のドラマについて ～そのイメージと捉え方～
G	韓国の若者に人気の食べ物は何か
H	韓国の美容に良い食べ物について
I	日本と韓国の屋台の比較



写真9 韓国文化探訪リサーチ発表の様子

9月18日（土） 終日、自由行動であった。

3. 結果及び考察

ここでは、本研修に参加した学生のレポートの記述内容から、学生が得た「気づき」に焦点を当て、本プロジェクトの実施意義について考察する。「文化への気づき」「言語学習への気づき」「日本語学習者への気づき」「日本語教師に求められる資質への気づき」の4つの観点から学生のコメントを引用しつつ述べていく。

1) 文化への気づき

外国の文化を知ると同時に自分の母文化を再発見することにも繋がる。今回の研修で韓国と日本の文化の違いに触れ、今までの常識だと思っていたことが実は世界基準で見たときにそうではないということに「気づいた」というコメントが顕著に見られた。

例1：今まで日本の文化について深く考えたことなどなかった。当たり前だと思って普段から生活していたため、何が日本特有の文化であるのかに気づけなかったのである。今回、衣食住など様々な韓国の文化に触れることで、日本の文化をも知ることができた。

例2：異文化に触れて初めて見える自分の国の文化の誇るべき点や見直したい点などがあると思う。

そして、例3、4に見られるようにその気づきは異文化を背景とする人とコミュニケーションを取る際に、どのような態度、姿勢で臨むべきかという考え方への気づきに結びついていた。

例3：留学生さんや外国で生活している人々が日頃どのような気持ちで生活しているのかが少し理解できたと思う。言葉だけではなく、今まで母国で生活してきた自分のなかの「当たり前」が通用しないということはとても大変なことである。文化というのは押しつけるものではない。「日本に来たのだから…」と行って相手のことも考えず日本の文化を押しつけてはならないのだと感じた。お互いの文化を尊重し合うことによって異文化コミュニケーションは初めて成り立つのだ。

例4：文化の違いについては特別授業「異文化コミュニケーション」を受けて、とても考えさ

せられました。自分の国の文化とは違うから変だと言ってすぐにそれを受け入れるのを拒否するのではなく、一度考えることが大切だということを知りました。(中略) 特別授業を受けた後、大真大学校の学生さんたちと街にリサーチしたときは、少しずつではありますが文化の違いを受け入れることができ、スムーズにリサーチすることができましたし、学生さんたちとも打ち解けることができました。

自分の常識(文化)は相手の常識(文化)とは限らない。最初は文化の違いに戸惑うこともあるだろうが、すべて自分の物差しで測るのではなく相手の文化を尊重する態度が必要であると「異文化コミュニケーション」の授業や学習者との交流を通じて感じるようになったようである。

2) 言語学習への気づき

今回の研修では韓国語の授業体験があり、ゼロから外国語を学ぶという経験をした学生が多い。例5、6は外国語習得の難しさや効果的な習得方法について気づきを得たことを示すものである。

例5：日本語にはない発音は、耳で聞いて分かっているつもりでも口に出してみるとやはり違っていて難しかった。母国語にない発音を習得することの難しさを改めて感じた。そして外国語を習得するためには、その国に行って実際に現地の人の言葉を自分の耳で聞くことが大切だと感じた。

例6：韓国語は仕組みが英語と似ていると思った。子音と母音が組み合わさって初めて一つの音なる。しかし、どの文字をどう組み合わせるとどの音になるということが全くわからない

め、とても苦戦した。改めて、外国語を学ぶ大変さを実感することができた。

さらに、日本語学習者との交流の中で自分の母語である「日本語」への気づきも見られた。

例7：日常会話において「とたん」と「ぱっかり」の違いを聞かれ、はっきりと答えられなかった。その違いを知りたいと思うと同時に、日本語の難しさや面白さを改めて実感した。

例8：普段何気なく使い分けている同義語の区別の仕方を聞かれた時、うまく答えられずに言葉が詰まってしまった。授業でやったような場面に実際に遭遇し、自分自身が日本語を正しく理解していなければ教えることができないのだと実感した。

また、どのような言語学習方法が外国語習得を促すのか、について日本語の授業を見学する中で発見したことを示すものもあった。

例9：韓国では高校から英語の他にもう一つの言語を学習しなければならない。慶福ビジネス高等学校で実際その日本語の授業風景を見学させていただいたが、学生の発言も多く大変熱心に授業に取り組んでいた。日本とは異なる「積極的に発言が飛び交い、生徒が主役の授業」こそが、短い期間で外国語を身につける最大の秘訣なのだと感じた。

3) 日本語学習者への気づき

多く見られたのは例10や例11のように、日本語を熱心に学んでいる学習者の存在に対する感動や相手に尊敬を示すコメントであった。

例10：日本語を勉強している人を見て素直に私

たちの母語である日本語を勉強してくれていることに感動しました。

例11：同年代の日本語学習者との交流では、自分と変わらない歳なのにもかかわらず、第二言語を習得し、きちんと意思疎通ができることに日本語への興味・関心の高さ、やる気や努力の差、日本語教育のレベルの高さを感じました。

こうした気づきは例12のように、日本人の外国語学習に対する態度、外国語学習に消極的な自分たちへの反省に結びついていた。

例12：韓国と日本を比較して考えてみると明らかに韓国の人たちの方が日本語を習得していると思われる。(中略)日本人はなかなか他の言語を習得することに積極的ではない。外国人が日本語を使えることに日本人は甘えて、自らが相手の国の言語を覚えようとしな、という人が多いのではないかと思った。自分自身もだが、日本人は他国の言語や文化に興味関心を示すべきであると思った。

4) 日本語教師に求められる資質への気づき

最後に、日本語教師の立場で学習者と接するときどのようなことに気を付け、自分自身が努力していくべきか、ということに関しての学生の気づきを示すコメントをまとめる。

まず顕著に見られたのは例13のように一般的な「知識」の不足を感じ、さらにそうした知識を身につける必要性を感じたことを示すコメントや、例14のように、日本がかつて植民地支配をしていた「歴史」への理解が教師にとって不可欠なものであるという認識を持つようになったというコメントである。日本語教師は言葉だけを教えるのではない。研修を通じ、自分の母文化、歴史への意識をさらに高める必要性を

強く感じたようである。

例 13：私はもっとたくさんの知識をもつべきだと感じた。今住んでいる仙台のことを聞かれてもきちんと答えられないのではダメであると思う。いつ聞かれても答えられるようにしたい。

例 14：ロッテワールド民俗博物館では韓国の歴史を詳しく見ることができた。特に印象的だったのが、日本が韓国を占領している時代だった。店の看板が日本語で書かれ、料理までもが日本のものだった。(中略)日本語や日本の文化を外国人に教える上で、相手の国の歴史を知り、日本とどのような関係にあったのか知っておくべきだと感じた。

また、学習者の不安や戸惑いを理解することの重要性を指摘するコメントも多く見られたが、それらは主に韓国語学習体験から実感したものであった。教師が学習者の立場に立つことの大切さが指摘されている。

例 15：自分が全く韓国語を話せないという状況のために、様々な場面で上手くコミュニケーションがとれずもどかしい思いをすることもあった。しかし、そういう思いを日本にいる学習者達は感じているのだろうと思うと、こういう状況も経験していたほうが学習者の心境を理解し、学習者側に立つことができるだろう。アウェイな立場を経験することは本当に大切だと思った。

さらに、「2) 言語学習への気づき」でも述べたが、どのような学習方法が外国語習得を促すのかを考える機会になったようである。例 16はこのような言語学習の「場」を作ることが教師の役割であるということに「気づいた」例と言えよう。

例 16：他の国の言語を理解するためにはその国の文化を知ることも大切だということや、先生と生徒との学習のやり取りがとても楽しそうで、日本の英語教育のように文法だけを教えるのではなく、もっと実際の会話を用いてコミュニケーションを取りながら、楽しく身につけていく必要があるのだと、自分なりに気づくことが多々あった。

常に異文化接触の最前線に立つ日本語教師にとって必要なのは言葉の知識だけでない。異文化を背景とする人とどうコミュニケーションするか、外国語を学ぶときにどんな心理になるのか、など相手の立場に立って物事を考え、授業を創造する技量が求められる。自らを客観的に捉える力が基礎になくてはならないだろう。

研修の実施を通し、本プロジェクト「日本と世界をつなぐ日本語教員」になるために必要なマインドを学生自らが見つけ出すことができたのではないかと考える。プロジェクト終了後も、この芽を着実に育てていけるような機会を学生とともに作り出していきたいと考えている。

4. 参考文献

国際交流基金(2010)『2009年海外日本語教育機関調査』結果(速報値)